

教育研究所だより



令和4年2月25日 NO.93

通級指導教室『ことばとまなびの教室』の取組紹介 ～通級による指導を通常の学級で生かすために～



はじめに

2月も下旬になりました。各小中学校においては管理職の先生方のリーダーシップのもとで、「通級指導に係る校内委員会」が開かれ、1年間の総括と次年度に向けての支援や指導の計画等について検討されていることと思います。

この紙面では通級指導教室について紹介します。この機会に通級指導教室のことをもっとよく知り、通常の学級に在籍する児童生徒の指導や支援、合理的配慮に生かしていただきたいと考えています。

1. 通級による指導とは

通常の学級に在籍する発達に課題のある児童生徒のうち、教室環境を整備したり、支援機器を用いたり、教材・教具を工夫したりするだけでは、落ち着いて学校生活を過ごしたり、学力の定着を図ったりすることが難しい児童生徒もいます。そのような児童生徒に対して、各教科等の指導の他に、学習場面や生活面で生じる困難さを改善・克服するために、発達の課題に応じた特別の指導を「通級指導教室」という特別な場で受けることを「通級による指導」と呼びます。

現状では、「通級による指導」は月に1時間から週に1～2時間程度です。そして、その指導の効果が通常の学級における授業や生活において発揮できるようにすることが重要です。

2. 通級による指導の対象児童生徒と指導内容

栗東市の通級による指導の対象は、主に、

- ・言語に関する課題のある児童生徒
- ・発達障がい(またはその疑いのある)児童生徒

です。発音の課題、吃音、場面緘黙、LD、ADHD、ASDなどがそれに当たります。

指導の内容は、「自立活動」(特別支援学校学習指導要領に示されている)です。そのため、通常の学級での学習の遅れを取り戻したり、予習・復習の目的で各教科の学習を取り扱ったりすることは認められていません。

例えば、LD や ADHD 等があるために学習に困難が見られるケースでは、教科の内容を取り扱いながら、自分にあった学習方法やツールを見つけ、それをうまく取り入れて自分で学習を進めていけることを目指しますので、一人一人の課題も指導内容も異なります。



▶個別指導で言葉づくりのゲーム。たくさん言葉をみつけてみよう!

また、それぞれの課題に応じて、個別の指導だけでなく、複数でのグループ指導も行っています。コミュニケーション



や社会性の力を伸ばしたり、少人数の場で自信を付けたりします。仲間と一緒に思いを共有する場でもあります。

▶グループ指導(SST)でボッチャをしています。ちゃんと順番守れるかな?負けても、怒らないで最後まで頑張れるかな?

通級による指導で、すぐに課題が改善するわけではありません。『苦手なこともあるけれど、こんなに素敵な自分』を認められるよう、子どもたちと一緒に悩んだり喜んだりしながら、うれしいことはもちろん、困っていることなど何でも話せる場であることを心がけています。いずれにしても、最終的には自分のことをきちんと理解し、自己肯定感を高め、“自分らしく しなやかに”生きていくことを目指しています。それには、保護者はもちろん、担任の先生との連携が欠かせません。



▶楽しく体を使いながら、集中すること、よく見ること、目と手の協応、ボディイメージ等々身に付け、担当の先生と一緒にたくさんラリーが続けられたよ。とっても、うれしかったなあ。

3. 今年度の通級指導教室での取組について

今年度は県の「学びにくさのある子どもへの指導充実事業」指定を受け、特に通級による指導を受けている読み書きが苦手な児童生徒への支援に焦点をあてた指導実践、事例検討をすすめました。

【事例1】小学生

対象児の実態

- ・読みについては、ひらがな・カタカナは、ある程度習得できている。漢字は、推測読みが多い。すらすらと読むことが難しい。
- ・書きについては、書き写すことについて問題はないが、文字を思い出して書くことに困難がある。

通級指導教室における指導・支援

ねらい

- ・国語科の教科書を流暢に読むことができる。
- ・自分に合った漢字の学習の仕方が分かる。

使用教材および教具

- ・読みの困難さについて、音声ペンを使って教科書の範読を聞き、流暢な読みに慣れる。
- ・教科書の文章で、読み方がわからないときに、音声ペンを使うことにより、自分で読み方を確認することができる。
- ・タブレットの指書きなど、自分の書きやすい方法を試す。



▶音声ペンを使い、教科書を予習として読んでいるところ。

指導内容【個に応じた指導・支援】

- ・読むことの苦手さにより、内容が理解しにくい状況を改善するため、音声ペンで文章を読みあげること、読むことに集中し、内容理解を促進する。
- ・苦手に思っている読み書きについて、できるようになったことを共有し、音声ペンの活用により苦手さの改善につながっていることを確認する。

指導結果（評価および児童生徒の変容等）

- ・初めて出会う教科書の文章の音読は音声ペンを活用しているが、学校での学習が進むと熟達して、音声ペンはほぼ不要になった。文脈のない熟語だけの時は、音声ペンで読みの確認が必要となる。
- ・書きの指導については、現在カタカナをメインに五十音を覚える指導、空間認知を育てられるような課題に取り組み、練習の途中である。

今後の課題

- ・音声ペンの使用や、本人が落ち着いて学習に取り組むことができるようになったことから、読みや書きの力がついてきていることが分かる。特に読みについては、教科書の文章を流暢に読めることが増えた。また、本人が自信をもち、音声ペンの使用が減った。今後は、書きの困難さについてどのように取り組むとよいか考えていく必要がある。

【事例2】中学生

対象児の実態

- ・漢字の読み書きが苦手である。読みは小学校3～4年程度、書きは小学校2～3年程度である。
- ・数学の計算に時間がかかる。小数のかけ算、割り算が特に苦手である。
- ・授業中の板書をノートに写すのに時間がかかり、先生の話が聞けないことがある。
- ・授業に集中できず、居眠りをすることがある。
- ・プリントやテストは全教科ルビ打ちのものを使っている。

通級指導教室における指導・支援

ねらい

- ・自分に合った学習の仕方を身につける。
- ・授業に集中して話を聞けるように、タブレットで板書の写真を撮影しノートの代わりにする。
- ・自分の得意なことと苦手なことがわかり、自分に自信がもてる。

使用教材および教具

- ・授業中の板書をノートに写すかわりに、タブレットで板書を撮影する方が授業に集中できると考えた。あとでプリントアウトすることを考えて、使いやすい自分のタブレットを使用する。
- ・夏休み明けのテストから国語、理科で読み上げをしている。
- ・時間配分を考えてテストを受けるのに有効なので、2学期の期末テストから読み上げの代わりに理科で音声ペンを使用する。

指導内容【個に応じた指導・支援】

- ・効果のあるタブレットの使い方について一緒に考える。（何のためにタブレットを使うのか、どのタイミングで写真を撮影するのか、撮影した後はどう活用するか）
- ・家での学習の仕方（テスト前の学習や計画、撮影した板書の活用）
- ・聞く力をつける。（聞き取りワーク）
- ・目のトレーニングをする。（点つなぎ、違いを見つける、迷路）



指導結果（評価および児童生徒の変容等）

- ・タブレットを使うことによって、先生の話聞くことに集中できるようになった。写真を撮るタイミングも声かけ（合図）があるので、1時間の授業で2回くらいになった。以前のように何度も撮影したり動画をとったりすることはなくなった。
- ・板書の写真を撮るときに、大事なポイントを確認したり書き込んだりすることやプリントアウトしてノートに貼ることを考えている。
- ・2学期最初の課題確認テストから国語と理科で読み上げをしている。本人にとってテストの内容の理解がしやすく効果があった。

- ・次の段階として、時間配分をして自分のペースでテストに取り組むために理科で音声ペンを使うことにした。

今後の課題

- ・テストでの読み上げは、本人にとってわかりやすく効果的であったと思われる。時間配分をしながら自分のペースでテストを受けるために2学期末テストの理科で音声ペンを使ってみることにした。今後は音声ペンを使う教科を増やしていけばと考えている。
- ・タブレットで板書を撮影するときにポイントにアンダーラインや書き込みをするなどの工夫ができるように支援する。

4. 通級による指導を通常の学級で生かすために

【事例1】

通級指導教室と通常の学級の連携ポイント

- ・音声ペンの使用により、文章理解がしやすくなったことを伝え、別室でのテストを受ける時にも音声ペンを使う機会をつくった。
- ・クロームブックを使う時には、ルビをつける機能や読み上げの機能を紹介し、必要な時には使用してもよいことにした。

通常の学級における(学級全体への)理解教育等

- ・宿題に自主学習を出し、本人の課題に合わせた個別対応のプリントを用意して、書きの練習・復習ができるようにしている。
- ・音声ペンで範読を聞き、正しい読みを確認することで音読に代替する。
- ・クロームブックのルビをつける機能や読み上げの機能は、必要な人は使ってもよいことを学級全体に伝える。
- ・漢字を書く量など、個別に対応し、量の調整を行っている。

通級指導教室と通常の学級の連携による指導・支援の成果と課題

- ・ルビをつける機能やふりがなや読み上げ機能については、使うことができています。しかし、音声ペンについては、みんなが使っていないものは使いたくないという本児の思いがあり、教室で使うことは難しい。他の人とは違う機器の使用について、本人の思いを大事にしながらも、周囲の理解を進めていくことは今後の課題である。
- ・学級で漢字ドリルや板書をノートに書き写すことができるようになった。特に漢字については、書ける字が増え、本人も自信をもつようになった。また、学級と通級指導教室の両方で、頑張っていることを認めるようにしている。しかし、以前から苦手としている拗音や長音、促音などの特殊音節や片仮名については、課題が残っている。

【事例2】

通級指導教室と通常の学級の連携ポイント

- ・職員会議で教科担当の先生方に以下の支援について確認した。
 - ① 板書の写真を撮るタイミングを合図や声かけで示すこと。
 - ② 視覚支援が有効であること。
 - ③ 指示の出し方は、短くわかりやすく伝えること。
 - ④ 必要に応じて、課題の量の調整をすること。

通常の学級における(学級全体への)理解教育等

- ・本生徒が板書をノートに写すのに時間がかかるので、自分のタブレットを家から持ってきて、板書を撮影することを学級の生徒に担任から説明した。
- ・全教科担当ができる限り視覚支援を行うとともに、指示の仕方は短く、具体的にした。また、穴埋めのプリントを用意するなど書く負担を軽減し、聞くことに集中させる工夫を行った。
- ・教師が板書の写真を撮り共有フォルダーにアップしている教科が増えてきた。そのことによって、欠席の生徒も含めて必要な生徒はいつでもタブレット端末から見られるようになった。

通級指導教室と通常の学級の連携による指導・支援の成果と課題

- ・対象生徒の様子や通級指導教室での取り組みについて、定期的に職員会議で話すことにより、通常学級での教科の授業に生かしてもらえるようになった。
- ・黒板をノートに写す代替手段として写真を撮る方法を読み書きの苦手な生徒だけでなく全員にアナウンスすることによって、周りの目を気にせずに写真が撮れる。(写真の撮り方にルールは必要)
- ・教師が読み書きの苦手な生徒や特別に支援が必要な生徒に対して、板書の仕方やプリントを工夫すること、指示の仕方や視覚支援などを見直す授業改善につなげることが課題である。

おわりに

アメリカには印刷物障害(Print Disability)という障害の捉え方があります。これは紙の印刷物が情報を伝える媒体として広く使われていることにより、紙の印刷物にアクセスすることが難しい人に、その不利益が集中することにより生じている障害を指します。視覚障害、読み書き障害というように障害を個人に紐づけるのではなく、社会の側の問題として捉えた障害名だと言えます。印刷物障害に対しては、情報を渡す媒体を電子ファイル等の紙以外の形式にすることで、その障害をなくすことができます。また、どうしても紙媒体で情報を渡す場合は、フォントを(できればUDフォントや)丸ゴシック体にしたり、字の大きさを少し大きめにしたり、改行幅を広めにしたりすることで読むことへの負担が軽減します。

最初にも述べたように、通級による指導で、すぐに課題が改善するわけではありません。また、通級による指導を受けていない児童生徒の中にも、読み書きについて配慮をすることで、得た情報をもとに内容を理解したり、思考したりという、より高次の学習にもっとエネルギーを使える子どもが少なからずいます。今回紹介した事例を参考に、通常の学級で学びの多様性を保障し、集団作りも含めた環境調整をして、すべての子どもたちが“自分らしさ”を発揮できるようにしていきましょう!





「体験を通して」 葉山東幼稚園



網を持って
しゅっぱーつ!



どこにいるかなあ

芋のつるで遊んだよ



ひっぱれー!
よいっしょ

葉山東幼稚園では、四季折々の草花や小動物に触れて遊べる自然豊かな地域性を活かし、その時々
の季節を楽しむ活動を大切にしています。

散歩では毎回、小さな発見やいろいろな体験ができ、散歩から戻った子ども達を迎えると、大切に持ち帰
った自然物を見せたり、自分が見つけたことを伝えようと楽しそうに話したりする姿が見られます。写真は
一例ですが、手作りの網をもって夢中になって虫探しをしたり、園の畑で育てたサツマイモの収穫では掘り起
こしたサツマイモの大きさや重さ比べをしたり、つるで綱引きや電車ごっこをしたり、いろいろな遊びにつな
がりました。また、小動物の世話や植物の栽培を通して命の尊さにも触れる経験もしています。

このような実体験を通してじっくり遊び込むことで子どもが興味・関心を持ち、主体的に物や人と関わり
自ら学ぶ力が育っています。園での活動で培った力が、小学校での学びにつながることを日々心にとめな
がら保育をしています。



話し合い活動を通して「仲間力でつながる」学校に

栗東市立栗東中学校

本校は、学校スローガンである「仲間力でつながる」を合言葉に、子ども
たちだけでなく、保護者や地域、教職員が互いに連携をとりながら魅力ある
学校づくりに努めています。

特別活動では、学級の課題を子どもたちが主体的に話し合って解決す
るため、自分の考えを発表し、互いの意見を尊重しながら議論し、合意形成を
しています。各学級の課題を話し合った後は、成長や課題を認識し、集団生
活の改善に協力する生徒の姿が見られます。

今年度は、特別活動の「話し合い」をさらに各教科に広げ、「主体的・対話
的で深い学び」の実現に向けて取り組んでいます。自分の意見を伝え、自分
とは異なる意見などに触れ、考えを広げ、深めています。各教科で目標とする
力が身につけられるよう、話し合い活動を有効的に活用し、授業改善を進めて
います。

話し合い活動を通して、「仲間力でつながる」ことは、学級や学校で居心地
のいい居場所づくりや集団としての意識向上にもつながっています。生徒同
士の「仲間力」はもちろんのこと、教職員の「仲間力」も大切にしながら、より
よい栗東中学校を目指していきたいと思っています。

